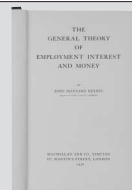


本誌の表紙に使われた貴重書

The general theory of employment interest and money London, 1936

J. M. ケインズ 『雇用・利子及び貨幣の一般理論』

KEYNES, John Maynard Keynes, Baron



ジョン・メイナード・ケインズ(1883-1946)は、20世紀を代表するイギリスの経済学者です。イートン校を経てケンブリッジ大学のキングズ・カレッジを卒業し、インド省に勤務した後、母校に戻って金融論を担当しました。その後大蔵省に勤務(1915-19)し、パリ講和会議には大蔵省首席代表、大蔵大臣代理となりました。しかし、連合国の対独賠償要求に反対して辞任し、自らの主張を『平和の経済的帰結』(1919)と題して発表します。その後も幾つかの著書を公にしましたが、1936年に出版された『雇用・利子及び貨幣の一般理論』はケインズ理論の集大成をなすもので、これによって彼は「近代経済学」の始祖としての地位を確立し、経済学においては「ケインズ革命」という流行語が生まれました。

彼は当時のイギリスを中心とした諸国が直面していた景気の不況と、大量の失業の存在という現実の経済社会を考慮しながら、古典学派の想定していたような「セーの法則」を否定し、たとえ賃金率を引き下げても失業の問題は解決しないこと、すなわち有効需要の増大によってその国全体の国民所得を高めることこそが失業の解消に結びつくことを説明します。

更に流動性選好関数、資本の限界効率、消費関数などの諸概念を説明し、この三つが与えられているとすれば、貨幣量を決定することによって利子率と国民所得が同時に決定されると説いています。この『一般理論』が持つ何よりの強みは、それが当時のイギリスが直面していた不況の原因を解明し、その克服の道を示唆した理論的・実践的な性格のものであった点です。これが後になってケインズ学派の流れとして継承され、世界各国における経済理論と政策の全体に影響を及ぼしています。

原寸 22.1X13.9cm

『洋書百選』(1972年本学図書館刊行)より抜粋、加筆

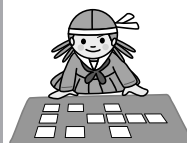
新春の図書館を詠む



積ん読に
虎の目しかる
多
年女
聞



めぐる時
心のすそに
梅おきて
日向雅



歌加留多
古え人の
さめぬ恋
政五郎



寝正月
布団の中で
本の国
よし子



料理本
片手につくる
新作雑煮
欽作

頓珍漢・素人俳壇